

黒衣の宰相金地院崇傳(五)

附 異國日記解題

辻 善之助

六 寺院法度制定

二 修驗道法度

修驗道法度の制定も、また紛議の結果なりき。當山本山兩派の争は即其制定の機會を作りしなり。修驗に二派あり、當山派及び本山派これなり。吉野より駆入て、大峯に攀ぢ、熊野三山の行を経て、紀州藤代を越え、葛城にて天下安全の祈念を成就す。之は七月六日より八月廿日に及ぶを以て、秋峯と名づけ、また逆峯と名づく。醍醐三寶院之を管す。所謂當山派是なり。この派は醍醐の聖寶が寛平七年に開きたるものにして、その宗旨は眞言宗に屬す。秋峯に對して春峯と稱し、また逆峯に對して順峯と稱するものあり。その始まりは修驗の開祖なる役行者に出づれ

史一

苑一

史 一 苑

ども、中世廢絶したりしを、鳥羽天皇の御代に、聖護院増譽の再興したるものにして、先づ葛城に入り、それより熊野山を経て、大峯を蹈分るなり。聖護院之を管す。之を本山派といひ、宗派は天台宗に屬す。この兩派は各その管區ありて支配し來りしが、徳川氏の世に及びて、夙く慶長八年に其争を起せり。その顛末は、義演准后日記等に見え、また當山門源記にも見えたり。その大略をいへば、慶長七年三寶院義演は、その管内なる修驗佐渡の大行院某に金欄の袈裟を許せり。然るに八年七月五日、本山派の播州の多聞坊といへるもの、大行院に打入り、その同宿の者を搦捕へ、道具を取散す等、亂暴を働きたる由注進あり。義演即ち使を以て之を聖護院道勝（後の興意法親王）に詰問す。道勝答に、金地袈裟當山派にかくること謂れなきにより、その計ひすべしとなり。是に於て、義演之を幕府に訴へ、その裁許を得んとす。近衛信尹、一條内基、傳奏廣橋兼勝、勸修寺光豐等、その調停に努めたれども成らず。九月三日に至り、醍醐山上山下のもの並に先達中菩提山、法隆寺、信貴山、多武峯、金剛山、伊勢世義寺、吉野山等十七人連署して、豐光寺承兌及び圓光寺元佑に訴狀を呈す。遂にその證據物件として、大和鳥栖鳳閣寺（この寺名は、當山門源記に、慶長八年當本兩派袈裟異同、評論有、則豐臣秀吉公兩門派、紕異義、證、和州鳥栖鳳閣寺安置理源大師自作木像、京師奉迎、板倉内膳正拜之、既當山派利運となるとあるに據る。義演日記にはたゞ鳥栖とのみあり。）

に安置せる聖寶自作の木像を迎へ、十月八日家康之を裁決して、「當山本山各別」と宣し、當山派即義演等の勝訴となり、尋で多聞坊大行院を糺明して、多聞坊曲事と宣せられ、聖護院より之を成敗せしめ、この一件落着せり。

この争は茲に一段落を告げたれども、兩派争訟の問題は未だ根本より解決せられざりしを以て、暫くにしてまた紛議を起すに至れり。抑々この問題たるや本山當山兩派の勢力範圍の争にして、而してまた經濟問題と密接なる關係を有せり。即ち山伏入峯役錢の徵收これなり。八年の紛議の後、四年を経て、慶長十二年に至り、關東の本山方山伏等先例に任せて、眞言宗の諸寺より、入峯役錢を徵せんとせしに、寺家は之を拒みて、終に訴訟を起し、同年十二月十八日、本多正信の亭に於て對決し、寺家方よりは、眞言宗三寶院末、浦和の玉藏院看海僧正出で、辯論し、谷全阿彌之を裁して、終に玉藏院看海の勝訴となれり。（慶長見聞錄案紙）この後一年を隔て、慶長十四年に至り、照高院（即聖護院兼帶興意法親王の關東に下りしとき、幕府は之に修驗道の判物を授けたり。その判物はたゞ「任往古法度」愛宕の山伏に袈裟金地を許すといふに止まりしが、是時照高院は陸奥武藏等に散在せる諸寺に向つて、山伏年行事職を許し、その管轄を命じたり。（その文書、今武州文書及び陸奥の諸寺の文書に遺り、また新編武藏風土記稿にも數多見えたり。）是れ畢竟本

史 一 苑 一

山派が當山派の勢力範圍に侵入を試みたるものにして、その利害の關する所、隨所に兩派の衝突を起せり。十六年八月十四日、當山派先達等、三寶院に告げて曰く、本山派の大善院、淡路國に於て、當山派のナカ坊を殺し、淡路一國悉く本山派に入れり。當山派のもの悉く吉野に立かへり、人數を率ゐて、本山派の入峯を止めんとす。義演乃ち之を駿府に訴へんとして、その準備せしむ。

十一月、當山派は二通の書を元信及び崇傳に上りて之を訴ふ。其第一通に於ては、冒頭まづ山伏の由緒をのべ、さて近來本山派のもの、其由緒を忘れ、「新儀非例」の沙汰多し。「所詮本山ハ昔のことく熊野ノ入峯可爲本意事。」次に山臥は袈裟筋を血脉として、當山本山の兩派相立てること、古今の常規たり。然るに「於所々當山之同行を引取或ハ殺害等前代未聞之義也。」本山派は妻帶先達なるを以て、血脉相承の道理に背き、入峯の作法また猥なること多し。又去々年聖護院殿の關東下向の時より、關東眞言宗のものに向て、入峯役錢を徴し、迷惑する由の注進あり。これまた停止せられんことを請ふ。次にまた本山方理不盡の次第、具に別紙にあり。「一々被成御糺明、惡引之輩、曲事に被仰付候て可被下候事。」其第二通に於ては、本山方暴行の次第を擧げて、

一、五月二十二日、淡路に於て、本山派の大善院は、當山世義寺方の同行ナカ坊を本山派に従はしめんとし、聽かざるを以て、搦取り終に之を殺害せり。

一、大善院は、淡路に於て、諸坊より金を押收せり。また但馬に到りては、本山派になるべしとて、觸狀を廻し、播州に於ては、當山派のものみな退くべし、従はざるものは住所を拂ふべしと命ぜり。

一、その後、大善院は七月廿四日に二百餘人を引つれ、弓箭を帶び、吉野川六田の二階屋に到り、當山派同行の中成敗すべきものありとて、數日待構へたり。當時當山派のものは、峯を通過し熊野路にかゝりたりしが、この事を聞いて、太平の世喧嘩は曲事たるにより、大善院の引去らんまでは吉野に出でず、且この事を聖護院に報じたり。

一、武藏松山に於て、觀音寺は泉光といへる山伏の本山に歸せざるを以て、之を成敗せり。

一、武藏寶藏寺今年當山へ入峯せんとせしに、荷物を押へ、剩危害を加へられたり。寶藏寺は乃ち之を不動院に詰問せしに、「關八州奥陸迄當山へ入峯之輩ハ堅停止之儀、」聖護院よりの命なりといへり。

一、上野國藤岡の菊藏といへる山伏、當山寶乘院の袈裟筋にて入峯せんとせしに、本山方より曲事なりとて過錢を取り、加之人數を率ゐて家内を闕所し、財寶を強奪せり。

一、佐渡の大行院は、當山の同行なるに、理不盡ニ本山に引取、弟子を討果せり。

「右當山本山之山伏、前々各別之袈裟衆筋」なるに、「近年於國々本山方々理不盡之儀」多し。「能々御糺明被成、惡行之輩被成御成敗候者可忝候以上。」

十二月十三日、本山派聖護院の勝仙坊より、これに對する辯明書を呈せり。その趣意は左の二箇條にあり。曰く、

一、伊賀殿へ上候目安六ヶ條御座候、此方一々申分御座候事。

一、當山本山方々、とり候事無之候。先々書物之上ニて、引もとし候へハ、新儀に取候様申遣候。

此方には證文多有之事。（本光國師日記）

十二月十五日、板倉勝重、駿府に下り、十七年正月七日、幕府は聖護院に命じ、本山方のものをしていそぎ下向せしめ、三月二十一日、また兩派の門跡を召す。義演等倉皇出發して、四月十三日遠江日坂に至りしに、四月八日發の圓光寺及び板倉勝重の書狀着せり。其書によれば、去一日、家康圓光寺を召し、在來の如く「當山ノ袈裟筋ハ本山ヘ引不致申分様」にすべしと裁せりと。即、各々舊に依て統轄すべしとの判決にして、「當山まるかち」（本光國師日記卯月廿六日榮任宛の狀）となれり。然るに、義演はこの注進の遅れたるが爲め、その下向を煩はしたるにより、意平かならず。遂に十四日、藤枝まで到り、圓光寺及び金地院等に計り、府中に入りて禮すべきや否を問ふ。

十六日命あり、禮に及ばずと。義演乃ち途中より歸る。初め義演の京を出でんとするや、崇傳は、さのみ急いで下るには及ばざる由を告げたり。その事、義演自らも日記に記し、また崇傳が四月廿六日圓光寺に與へたる書にも、義演の事をのべて、「先日下向之時も、照高院殿方、一兩日跡々御下可然由申候得共、御急之事ニ付、御心次第と申事ニ候キ」とあり。然るに性急なる義演は、遽に下向して、其徒勞となりたるを以て頗不平なりき。とまれ、十七年の訴訟裁決は當山派の勝訴に歸し、兩派の勢力範圍の問題は解決せられたれども、根本に横はれる經濟問題は未だ解決せられず。終に再び訴訟事件を起すに至れり。

十七年十二月の頃、當山派武藏足立郡倉田明星院祐長等、本山派の山伏先達等の注連被役錢を徴收するを停められんことを請ふ。家康之を裁し、シメハライの役の事は、北條家分國に限り、私なる法度なれば之を止むべしと命ず。

「三寶院文書第三回採訪に、慶長十七年八月六日付關東眞言宗諸寺廻狀あり。その趣は、去年より當山本山の争について、當山派のもの駿府に訴訟中、飛脚を關東眞言宗の寺に馳せて、この際かの山伏の入峯役錢を止むることを訴ふれば、事成り易かるべしと告げたるにより、即二三ヶ寺のもの駿府に出で、之を訴へ、終に役錢を止めらるゝ旨、家康の裁決ありたれば、今後必役

史 苑

錢は出すには及ばずといへるものにして、蓋しこの時のものならん。」

關東眞言宗のもの、其朱印を賜はらんことを請ふ。是に於て、家康本山當山兩門跡及び諸先達を召し、之を質さしむ。本光國師日記に、この事を記して、「猶も山伏方本山當山共ニ、能々兩門跡へ被成御尋可被仰付旨御詔ニ候、大穿鑿被成可申ト、咲止ニ存候」とあり。蓋し此時、家康は修驗道紛議の絶えざるを以て、之を治定せんが爲めに、根本より糾尋して、その法度を制定せんとし、乃ち大にその道に關係あるものを集めて、之を對論せしめ、以て永久の制度を立てんとしたるなり。その趣はまた本光國師日記に見えたり。同書十八年四月七日、三寶院義演に與ふる書の中に「猶々永代之御法度此度可被相定ニ付而、御門主御下向候様ニと被仰出候、御望候而も可有御下向儀ニ候處ニ、何かと被仰候儀ハ、無御勿躰儀と存候」とあり。是に於て、三月二十九日、崇傳は家康の命を承けて、兩門跡を駿府に召し、尋でまた諸先達の先例に精通せるもの、世義寺飯導寺等をも召す。照高院は直に命に應じたれど、義演は病に托して出府を辭せり。蓋し去年の事に不平なるによるなり。崇傳乃ち再三、書を以て之を促し、義演は遂に四月二十一日を以て京を發し、二十八日着府す。五月五日家康兩者を城中に召し、之を裁決す。出仕せる者、照高院、三寶院兩門跡を始め、照高院方よりは、三井寺の日光院、千勝院、不動院の玉瀧勝仙院の小先等、三寶院方よりは、武藏明

星院、玉藏院、常陸の一乘院、小松寺、觀音寺、連覺寺等、及び當山方山伏先達、法隆寺、内山、三輪、靈山寺、梅本、世義寺等出頭す。義演その對決の情況を記して曰く、「先妻帶ノ由來ヲ被聞召了、千勝院罷出、淨藏貴僧ヨリノ由ヲ申入了、次賀茂川ヲ送ニ流ナト、申ニ付、其子細ヲ御尋、日光答説不入御意ニメ、其ヨリ法問ニ成テ、彼方手持ワルシキ也、次注連被之事申入處ニ、先山伏ノ儀可申入云々、仍當山先達共、訴狀ヲ上畢、數ヶ條雖及穿鑿、悉以屬理運了、次注連被之儀數刻及糺明、是猶以理運也。」家康の裁決は、本光國師日記によれば次の如し。

一、本山筋の山伏は、往古の如く本山へ、當山筋の山伏は當山に入るべし、峯下にて押ふることあるべからず。

一、注連被の事、これまた本山の山伏のみの役錢を、本山年行事徴收すべし。眞言（即當山派の方よりは取るべからず）。

史 苑

同十七日、義演は黒印の文案を呈し、廿一日家康判物を授け、六月六日秀忠また之を授く。當山本山各別、對眞言宗入峯役錢停止は、即その黒印の主旨たり。かくの如くにして、修驗道法度は制定せられたり。是時また關東新義眞言の法度を定めらる。蓋しこの訴訟に於て關東の當山方代表者なりし明星院の請によりしものならん。（武州文書明星院にその黒印見えまた本光國師

史 一
一 苑
日記にも右明星院に渡之とあり。その趣旨は、尙他の條下に於て論及すべきを以つて茲には略す。